

平成 22 年度ケンサキイカ日本海・東シナ海系群の資源評価

責任担当水研：西海区水産研究所（依田真里）

参 画 機 関：日本海区水産研究所、石川県水産総合センター、福井県水産試験場、京都府農林水産技術センター海洋センター、兵庫県立農林水産技術総合センター但馬水産技術センター、鳥取県水産試験場、島根県水産技術センター、山口県水産研究センター、福岡県水産海洋技術センター、佐賀県玄海水産振興センター、長崎県総合水産試験場

要 約

日本海から東シナ海に分布するケンサキイカは沿岸では主にいか釣りや定置網によって漁獲されており、沖合域では以西底びき網漁業、沖合底びき網漁業、中型いか釣り漁業によって漁獲されている。日本海西部～東シナ海における本種の漁獲量は 1988 年には 35 千トン余りだったが、変動しながら減少したのち、2001 年以降は 10 千トン前後の漁獲量で安定しており、2009 年には約 9 千トンだった。1980 年代後半から 2000 年代はじめにかけての漁獲量の減少は資源量の減少によるものとみられ、資源水準は低位で最近 5 年間（2005～2009 年）でみた資源動向は横ばいである。資源管理方策としては現状程度の漁獲量にとどめることが望ましい。資源量指標値の変動傾向に合わせて漁獲した場合の漁獲量を ABClimit、それよりやや少なく、不確実性を見込んだ漁獲量を ABCtarget とした。

	2011 年 ABC	資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	92 百トン	1.0 C2009	—	—
ABCtarget	74 百トン	0.8・1.0 C2009	—	—

年	資源量（百トン）	漁獲量（百トン）	F 値	漁獲割合
2008	—	90	—	—
2009	—	92*	—	—

*2009 年については暫定値。

水準：低位 動向：横ばい

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
漁場別漁獲動向	以西底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁） 沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁） 東シナ海やりいか試験操業報告（水研セ） 主要港水揚げ量（石川～長崎（10）府県） 月別体長組成調査（水研セ・山口～長崎（4）県） ・市場測定
資源量指数	資源量直接推定調査（底魚類現存量調査（東シナ海））（水研セ） ・着底トロール

1. まえがき

本種は沿岸域では主にいか釣り漁業、定置網漁業により漁獲される。沖合域においては日本海西部では沖合底びき網漁業、東シナ海では以西底びき網漁業が主体となって漁獲される。近年では中型いか釣り漁船による操業が夏季（6～10月）に行われ、主に東シナ海南部で漁場が形成される。

2. 生態

(1) 分布・回遊

本種は青森県以南の日本周辺からフィリピンまでの大陸棚上に広く分布する（奥谷 1980）（図 1）。東シナ海においてケンサキイカは周年にわたり南部沖合域に分布するが、夏季に分布域はもっとも広く、冬季には南部の一部に限られる（時村 1992）。また日本海南西部においては 2 つの回遊経路を持つ群れが存在し、ひとつは九州西岸沖で越冬し、春～初夏に北上（東へ移動）し、秋以降南下（西へ移動）して越冬場へ回帰、もうひとつは日本海南西海域の陸棚上に越冬場をもち、春～初夏に山陰西部以西では接岸あるいは西方向へ移動し、東部では東方向へ移動する群れであると考えられている（森脇 1994）。九州西岸沖の越冬場はまだ確かめられていないものの、男女群島以南の海域にあるものと推定されている。

(2) 年齢・成長

本種は雌より雄が大型になり、雌の最大外套背長は 41cm、雄は 50cm、寿命は 1 年と考えられている（図 2）。

(3) 成熟・産卵

東シナ海の大陸棚上で行われた着底トロール調査では、本種は春から秋にかけて外套長 2cm 階級に体長組成モードが見られたため、この海域では長期間にわたって産卵ふ化が行われていることが示唆されている（山田・時村 1992）。九州西岸域においても成熟個体が周年出現することから周年産卵を行うとみられるが、春、夏、秋が産卵盛期と考えられている（田代 1977、西海区水産研究所 1978）。また、日本海南西部においては、春と秋に群成熟率が高くなると報告されている（森脇 1994）。以上のようにケンサキイカ日本海・東シナ海系群には複数の発生群が存在することが知られている。おおむね外套背長 7～8cm（約 5 ヶ月）程度で成熟個体が出現する。

(4) 被捕食関係

小型の魚類、甲殻類、軟体類を捕食する。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲されており、長崎県が総漁獲量に大きな割合を占め、盛漁期は夏である。日本海西岸域では盛漁期は夏から秋にかけてである。沖合域では底びき網漁業が主体となり、漁場は沖合底びき網漁業は長崎県沖合から山陰沖にかけ

て広範囲である（図 1）。近年は春季の漁獲量が減少し、秋季の漁獲量が増加する傾向がみられる。東シナ海では大陸棚縁辺域に南北に広くケンサキイカが分布し、主な漁場は東シナ海南部の陸棚域で以西底びき網漁業によって形成されていたが、2004 年以降は、以西底びき網漁業は夏季に操業せず、漁業形態が大きく変化した。また、1991 年からは東シナ海において中型いか釣りによる操業が 6～10 月にかけて行われ、中心となる漁場は東シナ海南部である。中国・韓国・台湾でも漁獲されているとみられるが、詳細は不明である。

（2）漁獲量の推移

日本海西部～東シナ海における本種の漁獲量は 1988 年には 35 千トン余りだったが、変動しながら減少し、2001 年以降は 10 千トン前後の漁獲量となり、2009 年には約 9 千トンであった（表 1、2、図 4）。海域別でみると（補足資料 1-1）、九州西岸～日本海西部にかけては 1988 年の約 24 千トンから変動しながら減少し、2009 年は約 9 千トンだった（表 3、図 5）。一方、東シナ海南部は 1988 年には約 11 千トンの漁獲量だったが、減少が続き、2009 年には約 300 トンだった（図 5）。以西底びき網漁業による海域別のケンサキイカ漁獲量を図 6 に示した。東シナ海南部における漁獲の割合が高かったが、2004 年以降は北部での割合が高まった。

（3）漁獲努力量

沖合底びき網漁業、以西底びき網漁業の全体の網数は減少傾向にある（表 2）。また、ケンサキイカを対象として夏季に操業する中型いか釣り漁業の試験操業についても操業日数は減少傾向にある（表 2）。

4. 資源の状態

（1）資源評価の方法

以西底びき網漁業・沖合底びき網漁業・中型いか釣り漁業、および沿岸域でのいか釣り漁業の漁獲動向から資源動向を判断した。沖合底びき網漁業では漁獲努力量に減少傾向がみられることから（表 2）、CPUE（網数あたり漁獲量）を資源動向の指標と考えた。以西底びき網漁業でも、努力量が急減していることから（表 2）、2003 年のケンサキイカ有漁漁区について過去にさかのぼって漁獲量と努力量を計算し、CPUE を求めて経年変化をみた。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業 CPUE および漁獲量を資源状態の指標として考えた。

（2）資源量指標値の推移

以西底びき網漁業の CPUE は横ばい、沖合底びき網漁業の CPUE は減少傾向で、いずれも低い水準にある（図 7）。一方、東シナ海南部で主に操業する中型いか釣り漁業の CPUE は 2009 年には前年を大きく上回った。一方、各県代表港におけるいか釣り漁業のケンサキイカ漁獲量および CPUE の水準は異なるが、おおむね中～低水準とみられ、最近 5 年間で見ると横ばい～減少傾向にある（図 8）。

(3) 漁獲物の体長組成

沿岸いか釣り漁業（山口～長崎県）によって漁獲されたケンサキイカの月別体長組成の推移を図 9 に示した。いか釣り漁業では外套背長 10cm を超える個体が主たる漁獲対象となっており、特に夏季の盛漁期には外套背長 35cm を超える個体が漁獲されていた。図 10 には佐賀県主要港におけるケンサキイカ水揚げ物の体長組成を示した。

(4) 資源量の推移

東シナ海の陸棚縁辺域においては 2000 年から春季（5～6 月）に底魚類の現存量推定を目的とした着底トロール調査が行われている。計算された 2010 年現存量推定値は 2009 年並で、2008 年を上回った（調査海域 138 千 km²、漁獲効率を 1 とした計算）。漁獲物の体長組成を図 11 に示した。調査船調査によって漁獲されたケンサキイカは外套背長 10cm 未満のかなり小型のものが主体であった。

年	2000	2001	2002	2003	2004	2005
現存量推定値 (トン)	10,308	12,275	8,949	7,121	11,986	6,216
年	2006	2007	2008	2009	2010	
現存量推定値 (トン)	8,413	14,898	6,069	11,471	12,556	

(5) 資源の水準・動向

ケンサキイカ日本海・東シナ海系群には複数の発生群が存在することが指摘されており、本種を対象とする漁業種類も多く、それぞれの漁獲動向が異なる。しかし、それぞれの漁業の漁獲量や CPUE の動向から水準は低位、来遊量指数（補足資料 1-2）から動向は横ばいと判断した。

5. 資源管理の方策

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004 年以降はかつて主要な漁場となっていた東シナ海南部における漁獲量が落ち込んでいるが、この海域には中国船も多数出漁しており、漁獲の実態を把握するのは困難である。現状では資源の指標値にあわせて漁獲することが現実的であろう。

6. 2011 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

主要な漁業の資源量指標値や漁獲量の動向から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断した。2004 年以降はかつて主要な漁場となっていた東シナ海南部に以西底びき網漁業がほとんど出漁しない等、東シナ海南部における本種の漁獲状況は大きく変化している。資源管理方策としては現状程度の漁獲にとどめることが望ましい。

(2) ABC の算定

漁獲量と資源量の指標値が使用できることから ABC 算定規則 2-1) によって ABC を算定する。近年では最も漁獲量の少ない直近年（2009 年）の漁獲量をもとに

$$ABClimit = C_{2009} \times \gamma$$

$$ABCtarget = ABClimit \times \alpha$$

から算定する。

ケンサキイカ日本海西・東シナ海系群を対象とする漁業が複数あることから、ケンサキイカ資源動向を示す指標として来遊量指数を求め、その変化率から γ を定めた（補足資料 1-2）。最近 5 年間（2005～2009 年）で来遊量指数はほぼ横ばいで、年ごとの変化率の平均値は 1.02/年程度である（図 12）。来遊量指数の変化率の平均値から、 $\gamma = 1$ とした。不確実性を見込んだ α は基準値の 0.8 とする。

	2011 年 ABC	資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	92 百トン	1.0 C2009	—	—
ABCtarget	74 百トン	0.8・1.0 C2009	—	—

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2008 年漁獲量確定値	2008 年漁獲量の確定

評価対象年(当初・再評価)	管理基準	ABClimit (百トン)	ABCtarget (百トン)	漁獲量 (百トン)
2009 年 (当初)	0.8 C2007	93	74	
2009 年 (2009 年再評価)	0.8 C2007	84	67	
2009 年 (2010 年再評価)	0.8 C2007	84	67	92
2010 年 (当初)	1.0 C2008	93	75	
2010 年 (2010 年再評価)	1.0 C2008	90	72	

本年度、再評価において管理基準を変更しないという統一がはかられたことから、2009 年再評価値についても修正した。そのため昨年度報告における 2009 年再評価値とは異なっている。最近年の暫定値が確定したことにより ABC の算定値が変化した。

7. ABC 以外の管理方策の提言

本種の寿命は 1 年であり、加入量の多寡が資源状態に大きな影響を与えるとみられるが、現在のところ加入量変動を引き起こす原因については明らかではない。かつての主漁場であった東シナ海南部には以西底びき網漁船はほとんど出漁していないものの、多数の外国漁船が出漁していることから、高い漁獲圧がかかっている可能性がある。現在も出漁している中型いか釣りによる夏季の操業においては 2008 年まで漁獲量の減少が続いており、

2009年には増加したものの、資源状態の悪化が懸念される。我が国のみの努力で資源回復は難しいと思われる。

8. 引用文献

- 森脇晋平（1994）日本海南西部沿岸海域におけるケンサキイカ *Photololigo edulis* の生態とその漁況に関する研究. 島根水試研報, 8, 1－111.
- 奥谷喬司（1980）新、世界有用イカ類図鑑. 全国いか加工業協同組合, 東京, 66p.
- 西海区水産研究所（1978）西日本海域におけるケンサキイカ資源生態調査報告書, 92pp.
- 田代征秋（1977）九州北西沿岸海域のケンサキイカとその漁業. 日本海ブロック試験研究集録, 1, 81－96.
- 時村宗春（1992）1991年冬季の東海、黄海の主要底魚類の分布（海邦丸調査結果速報）. 西海ブロック底魚調査研究会報, 3, 15－39.
- 山田陽己・時村宗春（1992）東シナ海におけるケンサキイカの漁業と資源研究の現状. イカ類資源、漁海況検討会議研究報告, 163－181.



図 1. ケンサキイカ分布回遊図

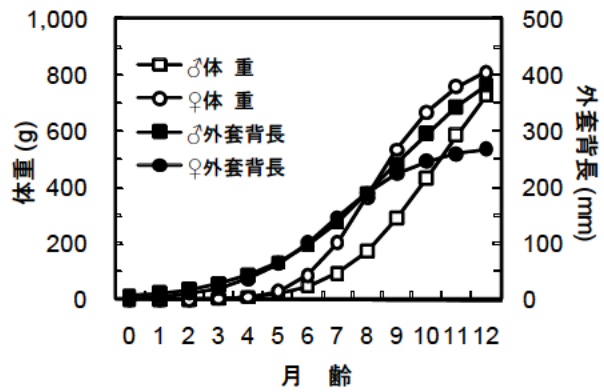


図 2. ケンサキイカの成長

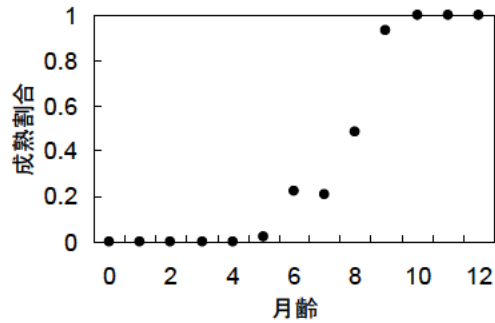


図 3. ケンサキイカ月齢別成熟割合図

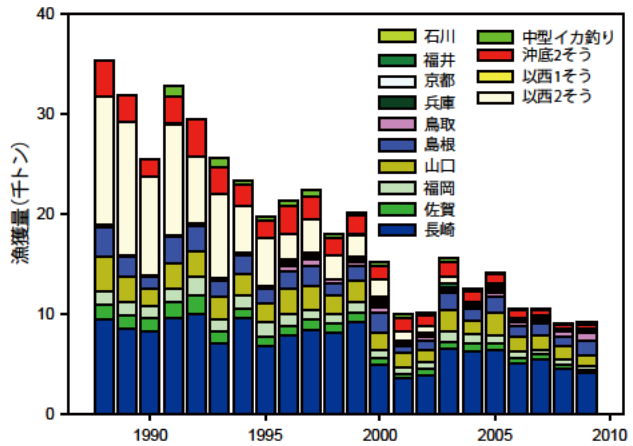


図 4. ケンサキイカ漁獲量

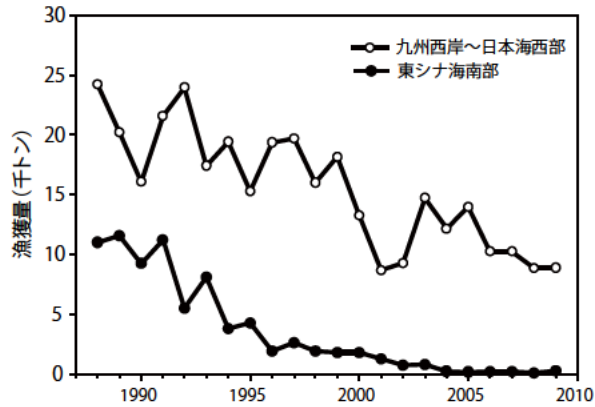


図 5. 海域別ケンサキイカ漁獲量

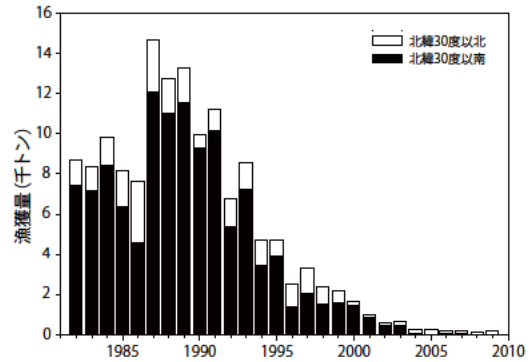


図 6. 以西底びき網漁業による
海域別ケンサキイカ漁獲量

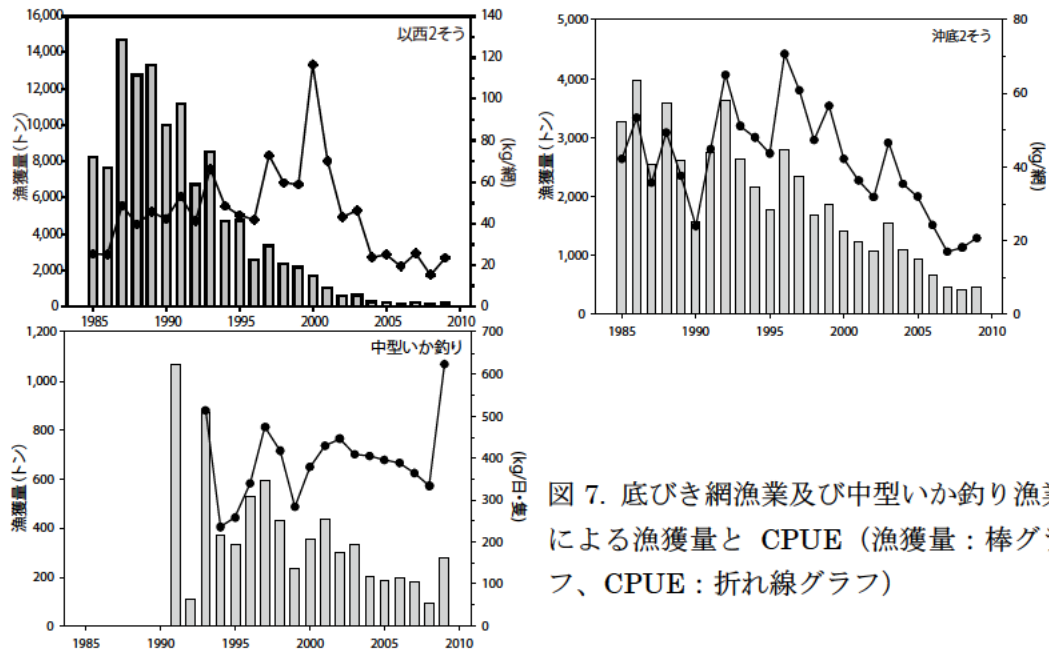


図 7. 底びき網漁業及び中型いか釣り漁業による漁獲量と CPUE (漁獲量：棒グラフ、CPUE：折れ線グラフ)

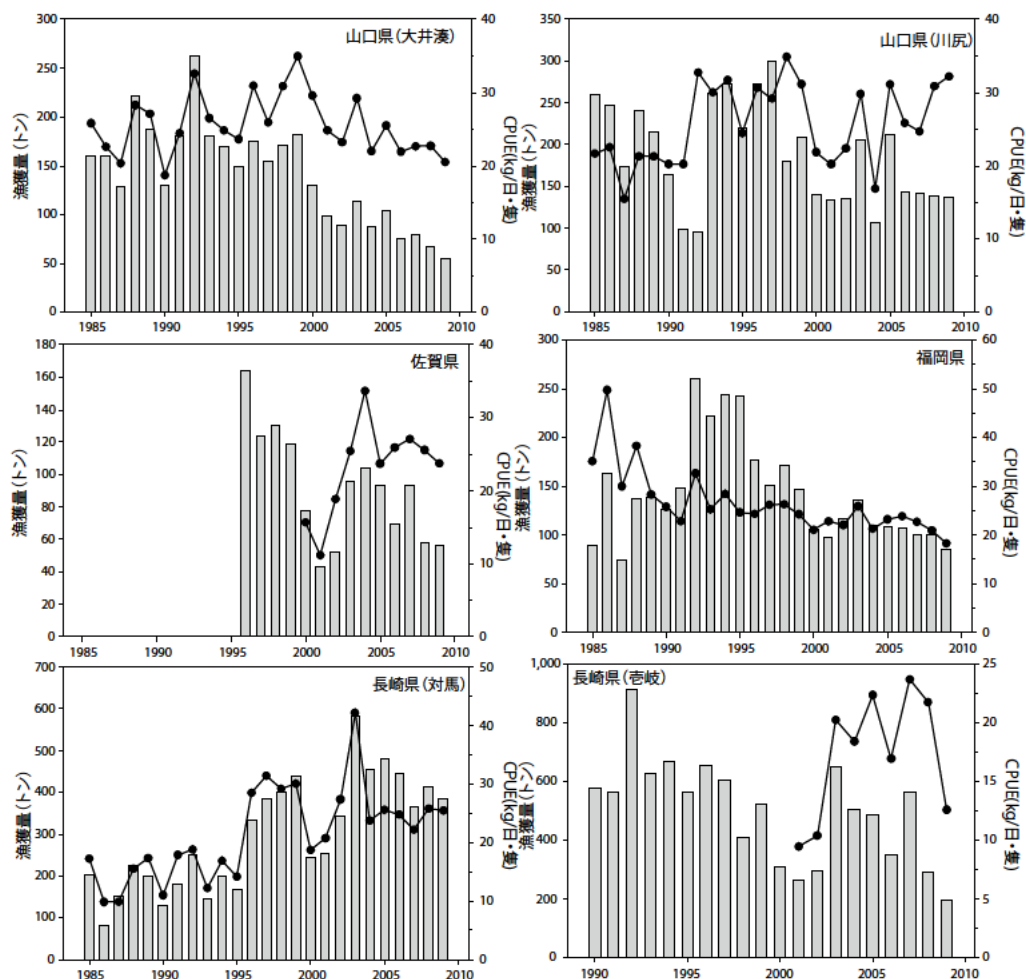


図 8. 各県代表港における沿岸いか釣り漁業による漁獲量と CPUE (漁獲量：棒グラフ、CPUE：折れ線グラフ)

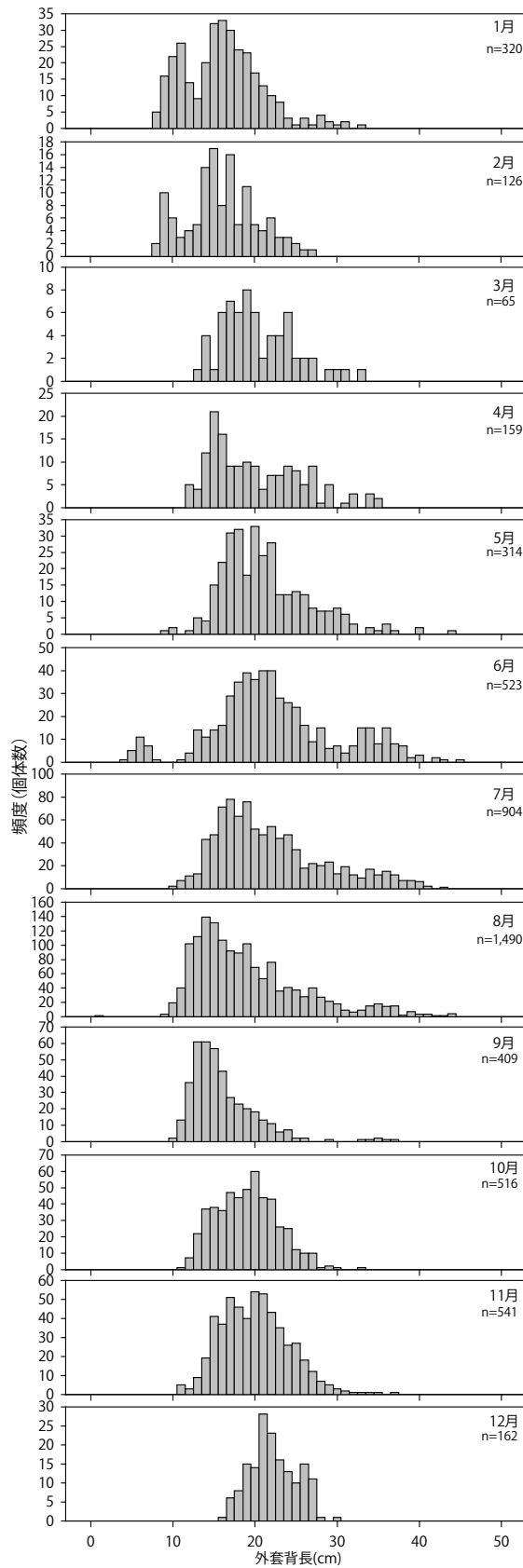


図 9. 沿岸いか釣り漁業によるケンサキイカ漁獲物体長組成 (2009 年)

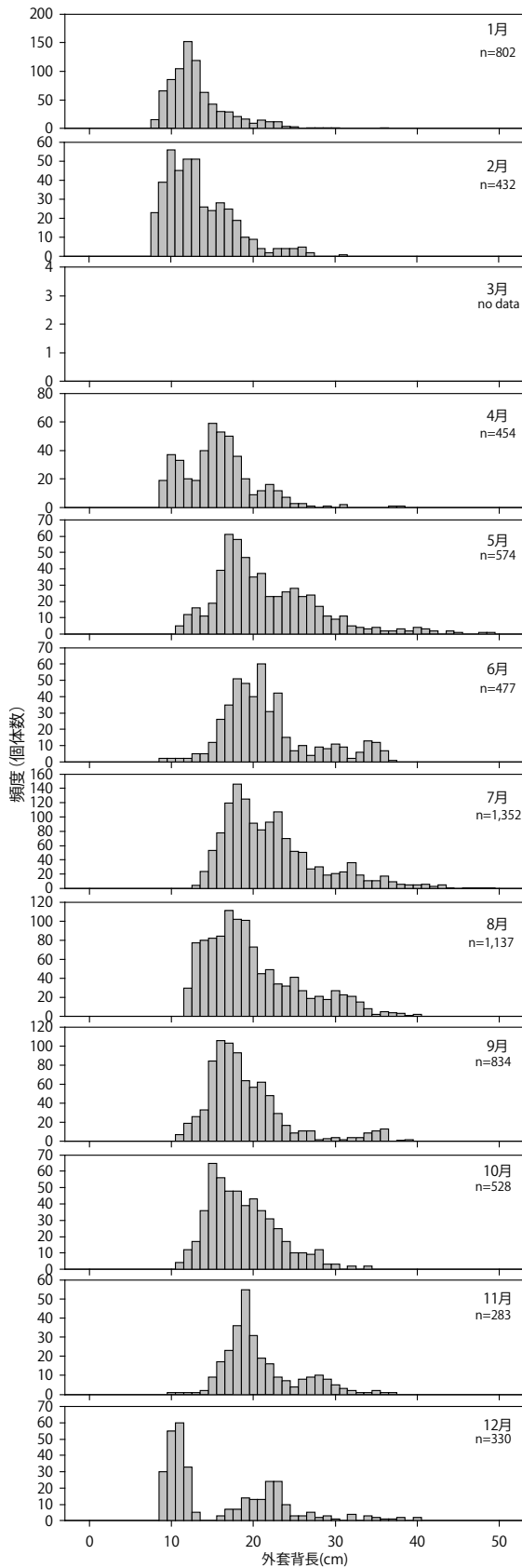


図 10. 佐賀県主要港におけるケンサキイカ漁獲物体長組成 (2009 年)

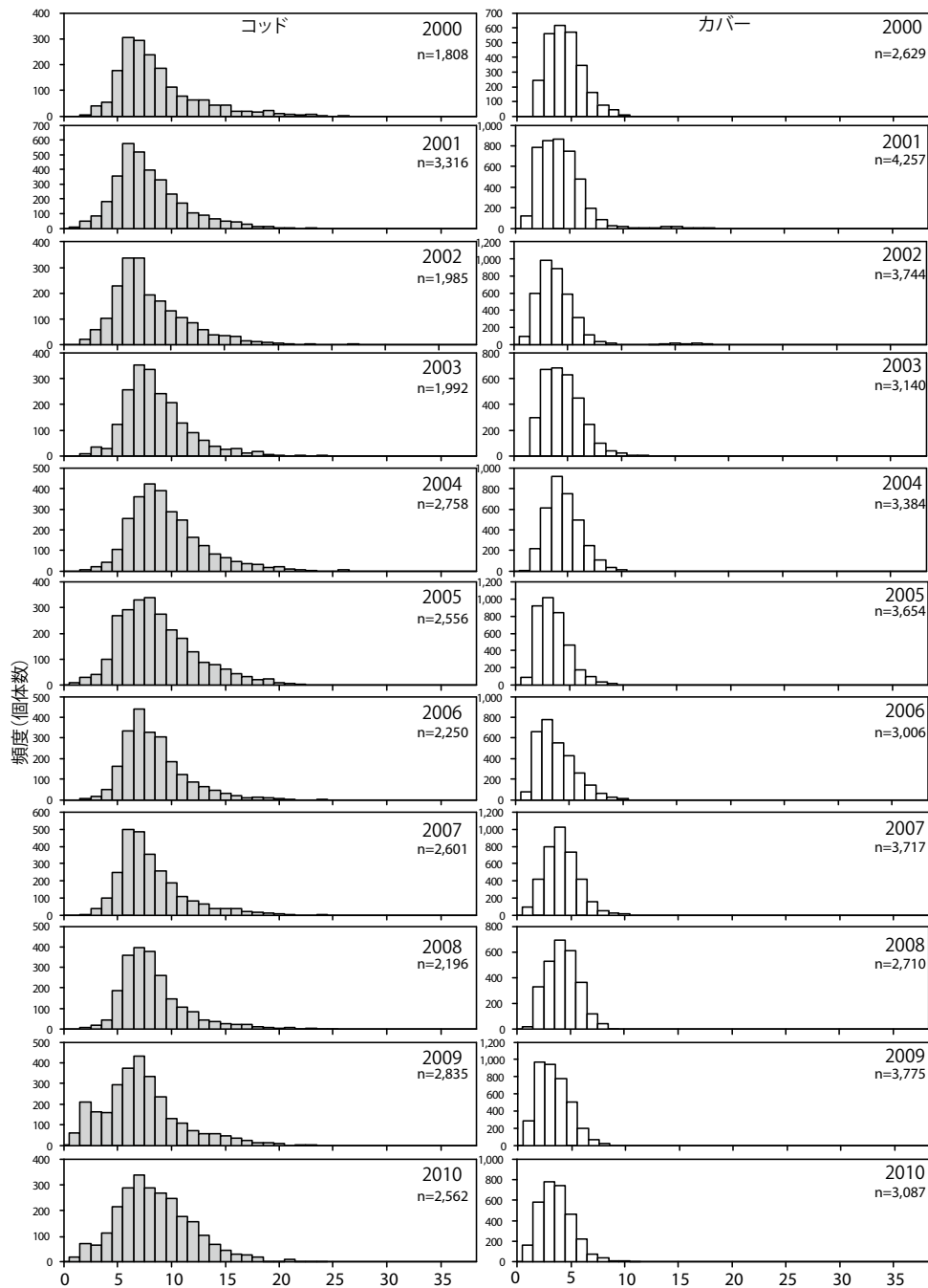


図 11. 着底トロール調査において漁獲されたケンサキイカ体長組成 (左：コッドエンド、右：カバーネット)

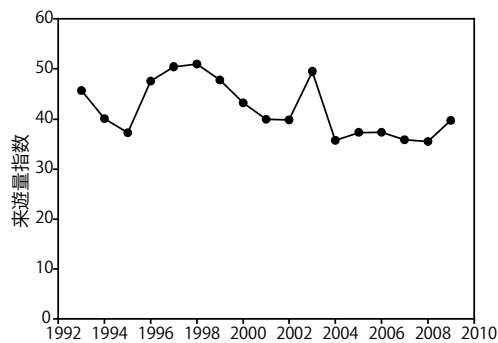


図 12. ケンサキイカ来遊量指数

表 1. 各府県における漁獲量（沖底（浜田以西）・以西分を除く）（単位：トン）

年	鳥取県	兵庫県	京都府	福井県	石川県
1988			254		
1989			188		
1990			103		
1991			96		
1992			95	175	
1993			87	101	
1994			88	89	
1995			139	136	16
1996	444	200	137	167	231
1997	719		247	220	86
1998	348		48	62	6
1999	429	187	179	190	13
2000	570	278	288	304	133
2001	201	142	58	78	12
2002	334	145	124	164	24
2003	359	130	179	312	24
2004	190	51	34	29	1
2005	426	260	192	186	23
2006	419	78	86	88	21
2007	337	136	75	90	20
2008	487	76	23	15	3
2009	731	74	38	65	19

年	長崎県	佐賀県	福岡県	山口県	島根県	小計
1988	9,468	1,445	1,385	3,344	3,016	18,912
1989	8,466	1,351	1,262	2,621	1,965	15,853
1990	8,246	1,265	1,193	1,816	1,149	13,772
1991	9,511	1,607	1,414	2,453	2,671	17,752
1992	9,900	2,007	1,761	2,625	2,427	18,990
1993	7,030	1,157	1,274	2,179	1,671	13,499
1994	9,525	927	1,350	2,140	1,896	16,015
1995	6,810	900	1,468	1,855	1,449	12,773
1996	7,836	1,030	1,102	2,514	1,796	15,457
1997	8,364	993	1,048	2,316	2,052	16,045
1998	8,018	1,035	893	1,879	1,191	13,480
1999	9,218	875	996	2,184	1,416	15,686
2000	4,806	719	910	1,634	2,004	11,647
2001	3,468	484	711	1,420	712	7,286
2002	3,856	552	699	1,257	961	8,116
2003	6,450	748	1,085	2,076	1,652	13,014
2004	6,273	753	945	1,325	1,249	10,850
2005	6,386	663	756	2,319	1,579	12,789
2006	5,018	582	611	1,495	1,044	9,440
2007	5,381	596	443	1,423	1,122	9,623
2008	4,473	393	550	1,345	953	8,318
2009	4,038	334	361	1,145	1,470	8,275

*2009 年は推定値を含む。

表 2. 沖合域における漁獲量と網数、日数（単位：トン、網数単位：千回）

漁業 種類	沖底 2 そう (浜田以西)		以西 2 そう		以西 1 そう		中型いか釣り 漁業		小計
	漁獲量	網数	漁獲量	網数	漁獲量	網数	漁獲量	日数	
1988	3,577	72	12,768	296	2	26			16,347
1989	2,619	70	13,318	269	1	22			15,938
1990	1,576	66	9,983	217	8	19			11,567
1991	2,760	62	11,160	188	86	22	1,068		15,074
1992	3,637	56	6,741	163	2	16	107		10,487
1993	2,642	52	8,539	118	0	11	871	1697	12,052
1994	2,152	45	4,711	97	0	10	371	1572	7,234
1995	1,767	40	4,765	86	0	12	332	1283	6,864
1996	2,790	39	2,554	61	0	12	530	1562	5,874
1997	2,346	39	3,350	46	8	13	598	1262	6,302
1998	1,675	35	2,379	40	69	13	435	1041	4,558
1999	1,868	33	2,184	37	40	12	234	822	4,325
2000	1,334	33	1,704	16	4	1	352	906	3,471
2001	1,234	34	1,014	14	0	0	437	1019	2,685
2002	1,055	33	609	14	1	0.2	297	665	1,961
2003	1,535	33	668	14	—	—	334	816	2,536
2004	1,092	31	271	11	—	—	203	501	1,567
2005	943	30	245	10	—	—	184	465	1,381
2006	663	27	184	9	—	—	195	503	1,042
2007	445	26	237	9	—	—	180	494	862
2008	424	23	143	9	—	—	95	286	663
2009	449	22	209	9	—	—	278	445	936

表 3. 海域別漁獲量（単位：トン）

年	東シナ海南部	九州西岸～ 日本海西部	合計
1988	11,023	24,236	35,259
1989	11,570	20,221	31,792
1990	9,257	16,082	25,339
1991	11,236	21,590	32,825
1992	5,517	23,960	29,477
1993	8,124	17,427	25,550
1994	3,818	19,431	23,248
1995	4,276	15,301	19,578
1996	1,962	19,368	21,331
1997	2,632	19,707	22,339
1998	1,954	16,016	17,969
1999	1,822	18,149	19,971
2000	1,809	13,269	15,078
2001	1,285	8,686	9,971
2002	765	9,311	10,076
2003	824	14,726	15,550
2004	261	12,158	12,418
2005	196	13,975	14,170
2006	225	10,259	10,484
2007	230	10,255	10,485
2008	110	8,871	8,980
2009	304	8,908	9,211

表 4. 月別漁獲量の推移 (単位: kg)

		山口県*	島根県*	鳥取県	兵庫県	京都府	福井県	石川県*
2009 年	1 月	14,577	3,332	6,078		209	5	0
	2 月	13,691	3,173	19,857		244	5	8
	3 月	6,575	1,855	0		184	32	83
	4 月	6,765	5,363	119	210	67	256	198
	5 月	26,380	15,549	1,022	409	449	1,543	97
	6 月	64,686	49,714	24,768	4,392	6,384	4,775	1,081
	7 月	108,516	63,759	53,696	17,873	12,432	21,065	4,568
	8 月	78,101	116,087	52,735	10,897	5,640	28,723	7,943
	9 月	215,571	266,208	199,537	13,220	5,468	5,653	4,615
	10 月	261,628	182,658	293,233	22,432	2,394	1,947	687
	11 月	88,580	62,402	60,234	4,157	1,561	271	64
	12 月	45,968	18,961	20,120		2,904	404	59
2010 年	1 月		770	4,618		772	171	1
	2 月		516	220		126	102	62
	3 月		2,035	0		547	354	44

		長崎県*	佐賀県*	福岡県*	沖底 2 そう (浜田以西)	以西 2 そう	中型 いか釣り
2009 年	1 月	1,108	2,503	6,109	5,360	20,245	
	2 月	200	1,675	6,011	5,860	5,049	
	3 月	764	1,083	2,478	13,260	2,314	
	4 月	1,980	3,829	20,073	26,160	1,999	
	5 月	4,424	4,029	19,502	32,320	864	
	6 月	15,024	4,451	43,168			11,977
	7 月	31,800	9,348	55,645			99,435
	8 月	68,356	10,872	44,715	78,500	64,225	109,165
	9 月	28,076	12,144	44,164	146,380	29,095	46,452
	10 月	37,908	10,127	52,334	96,040	20,058	10,626
	11 月	4,764	2,448	18,567	34,360	38,740	
	12 月	5,128	1,811	17,201	10,960	26,783	
2010 年	1 月		1,135				
	2 月		1,093				
	3 月		414				

*代表港における漁獲量。

補足資料 1

1. 海域別漁獲量

九州西岸～日本海西部海域の漁獲量は沖合底びき網漁業、沿岸域での漁獲量、以西底びき網漁業の北緯 30 度以北での漁獲量を足し合わせたもの。東シナ海南部の漁獲量は中型いか釣り漁業、以西底びき網漁業で北緯 30 度以南での漁獲量を足し合わせたもの。

2. 来遊量指数

山口（川尻・大井湊）・福岡・長崎県（対馬）の代表漁協における沿岸いか釣り漁業、沖合底びき網漁業 2 そうびき（浜田以西）、以西底びき網漁業 2 そうびき、中型いか釣り漁業の CPUE を用い、北原・原（1990）の方法により来遊量指数を計算した。

ある年 i の来遊量指数 R_i は、以下のように定義される。

$$R_i = \prod_j C_{ij}^{U/u_j}$$

ここで、 j は漁場、 C は CPUE、

$$U = \sum_j u_j^{-1}$$

u_j は 1993～2009 年の CPUE の対数の標準偏差。

なお、沿岸いか釣り漁業については山口県（大井湊）および福岡県における CPUE の相関が高かったため、この 2 つをまとめて計算した。集計期間は中型いか釣り漁業の CPUE データが得られる 1993～2009 年とした。

引用文献

北原 武・原 哲之（1990）回遊性資源の来遊量指数. 日水誌. 56: 1927-1931.